

Title	浜日出夫さんとの40年
Sub Title	40 years with Mr. Hideo Hama
Author	那須, 壽(Nasu, Hisashi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.89 (2020.) ,p.87- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿 エッセイ
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000089-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浜日出夫さんとの40年 40 Years with Mr. Hideo Hama

那 須 壽*
Hisashi Nasu

森川剛光さんから、「浜さんの思い出」を書いてくれないかと依頼され、浜さんに関係することだから断るわけにもいきまいと引き受けたものの、さて何を書いていいのか、何を書くべきか、いっこうにテーマが絞れない状態が続いた。40年に及ぶ浜さんとの付き合いであってみれば、浜さんとの思い出は山のようにあり、しかしこれが掲載される媒体のことを考えると、個人的で私的なことだけに終始するわけにもいかず、あれこれ迷いながら、取り敢えず浜さんが書かletたいいくつかの論稿を読み返してみることから始めてみた。まず手に取ったのは、H・ワグナー (Helmut Wagner) が編集した *Alfred Schutz On Phenomenology and Social Relations: Selected Writings* の翻訳書の「訳者あとがき」である。

私は、浜さんが森川眞規雄さんと共同で刊行された、隔々まで配慮の行き届いたこの共訳書『現象学的社会学』（紀伊國屋書店、1980年）によって浜さんのお名前に出会い、そしてA・シュッツの仕事の特性がじつに平明な文章で的確に紹介されている、浜さんの手になるその「訳者あとがき」によって、浜さんの名前をいつでも「想起」できるように「記銘・保持」した。

その数か月後のことだったと思う。私がお本人のお名前をすでに「保持」していることなどご存じない当の浜さんから、「〈日常〉の社会学—日常生活の世界と理解社会学」という浜さんの論文が掲載されている『年報人間科学』第一号(1980年)と共に、「突然お手紙を差し上げる失礼をお許し下さい」という書き出しで始まり、自己紹介のあと、私が公表していた二つの論文を読みたいのでその抜刷を送ってほしいと切手まで同封された、「6/23」という日付の入った手紙を受け取った。私と浜さんとの付き合いはここから始まったといってよい。ちょうど40年前のことである。

先述した「訳者あとがき」から、全体を見通したうえで要点を見抜き、それを的確かつ平易に表現する浜さんの並外れた力量をすでに感じ取っていた私は、依頼された私の論文の抜刷をお送りしたあと、すぐに『年報人間科学』所収の浜さんの論文を読み、「理解という問題」を軸にA・シュッツの現象学的社会学とM・ウェーバーの理解社会学とを対比させながら、前者を、「社会科学の基礎づけ」と「日常生活の世界」という二つのモチーフが独自に結合するものとして特徴づけようとしているそこの

* 早稲田大学名誉教授

浜さんの説得的な議論から、じつに良質の刺激を受けた。というのも、私自身、ウェーバーの理解社会学をテーマした修士論文を準備する過程で、主として米、独、英の学会誌を通して、当時わが国ではほとんど取り上げられていなかったシュッツの諸著作に出会い、幸運にも早稲田の図書館に所蔵されていた *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt* の 1932 年版を借り出して注意深く読み、そこでの議論がじつに重要な問題を取り扱っていることは理解できたものの、それを修士論文で取り扱うだけの自信をもつに至らず、1976 年 4 月に博士課程に進学したのを機に、指導教授の佐藤慶幸先生に頼んでその書をゼミのテキストに指定してもらってゼミ生全員で講読し、またそれ以外のシュッツの諸著作にも、ウェーバー社会学との比較という問題関心をもって取り組んでいた最中だったからである。

私が浜さんと直接言葉を交わしたのは、それから約一年半後の現象学的社会学研究会でのことであった。この研究会は、私よりも若干若い、じつに意欲的に研究に取り組んでいる人たちが発案し、好井裕明さん、山崎敬一さん、堀川淳一さんの三人が事務局を担うという体制を整えて 1980 年に第一回研究会を八王子セミナーハウスで開催して立ち上げ、その第二回研究会が慶応義塾大学三田キャンパスで 1981 年 10 月 12 日に開催され、その折の懇親会ではじめて浜さんと親しく話す機会がもてたというわけである。

そして奇しくもその数か月後の 1982 年 4 月、ウェーバー研究者としても名高い英明先生の後任として、当時、私の勤めていた新潟大学に専任講師として浜さんが赴任された。それ以後、所属学部は違ったけれども隣の建物にあったお互いの研究室をちょくちょく訪ね合い、たとえば赴任された直後に刊行された、シュッツの現象学的社会学は「ピグマリオンの神話」になぞらえられる実証主義と「メドゥーサの神話」を思い起こさせる超越論哲学のまさしく「間」に位置づけられる試みであることが明快に解き明かされている浜さんの論稿「ピグマリオンとメドゥーサー A・シュッツの“現象学的社会学”の位置」(『社会学評論』1982 年)について、といった研究上のことに限らず、個人的・私的なことも含めて様々な話題を取り上げて話し合った。

また、ヨーク大学の J・オニール (John O'Neill) さんが来日していて日本の研究者と交流したいと言っているので議論できる場を設定してくれないかという、国際大学の奥田和彦さんからの依頼に応じて、1985 年 4 月 22 日、一緒にコロキウムを開催したり、新潟大学が当番校になった「日本現象学・社会科学会」第三回大会 (1986 年 12 月 6 日～7 日) を共同責任者として一緒に準備・運営したりもした。

ここで再度「奇しくも」と言うほかないが、1987 年、J・オニールさんのもとで在外研究中の浜さんに筑波大学への移動の話が突然持ち込まれ、また私にも早稲田大学への転勤の話が突然持ち込まれ、1988 年 3 月、同時に新潟大学を離れることになった。

だがそれ以降も、様々な局面で浜さんとの縁は続いた。というよりも大半は、たとえば私のポストンでの在外研究中 (1994 年～1995 年)、ここで二度ならず三度までも「奇しくも」という言葉を使いたくなるが、浜さんも筑波大学の仕事の関係でロンドンに長期滞在されていて、これ幸いとばかりに家族ぐるみでロンドンに押しかけてお世話になったといった私的なことも含めて、一方的に私が浜さんに様々な協力・支援をお願いしたといったほうがより実情に近い。

ここでそれらのすべてを披歴することは不可能であるし、その必要もないと思うが、これまでお付き合いいただいた浜さんへの感謝の気持ちを込めて、そのいくつかをおおよその年代に沿って挙げておきたい。

まず思い浮かぶのは、1993 年 4 月 24 日に第一回の研究会を開催し、2010 年 6 月 5 日までの 18 年間

に、記録に残っているだけでも68回の研究会を開催した自我論研究会のことである。その発足は、1992年6月6日に東京大学で開催された関東社会学会第40回大会のテーマ部会「いま、あらためて“自我”を問う」にまで遡るが、ただし、いわゆるオーソライズとはまったく無縁で会則もなく、「質問が出なくなるまで続ける」「報告したい方よりも報告してもらい方に報告を依頼する」という二つの原則だけを頼りに運営され続けたこの研究会を、桜井洋さんと岡原正幸さんに促されて立ち上げる際に、その中心メンバーとして加わっていただくよう声をかけ、それに応じていただいたのが片桐雅隆さんや草柳千早さんであり、そしてもちろん浜さんであった。浜さんは、研究会にはほぼ毎回、参加され、報告者を選定して研究会を何度も運営され、またご自身も五度、報告されている。

次に挙げておきたいのは、1997年に早稲田大学で開催されたThe International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysisのカンファレンス(8月21日~23日)についてである。1995年10月、G・サーサス(George Psathas)さんとボストン大学近くのカフェテリアで会ってシュッツやエスノメソドロロジーについて話している際に、この学会を日本で開催できないだろうかかと相談され、帰国後、サーサスさんのアイデアを伝えてその実現への尽力をお願いしたその一人が、当時、シュッツからH・ガーフィンケルへの展開について考察を進められ、すでに「エスノメソドロロジーと『羅生門』問題」(『社会学ジャーナル』1995年)を発表され、のちに「ガーフィンケル信頼論再考」(『年報筑波社会学』1996年)、「シュッツ科学論とエスノメソドロロジー」(『文化と社会』2000年)といった構想力あふれる手堅い論稿を世に問われることになる浜さんであった。浜さんを含む数人の方たちとの数度にわたる話し合いを経たうえで開催されることになったこの国際会議での私の役回りは、私以外のエスノメソドロロジーに積極的にコミットしている実行委員の方たち(浜、西阪仰、山崎敬一、北沢裕)の下支えをすることだったが、浜さんはじめこれらの方たちは、膨大なエネルギーを投入してこの会議をみごとに運営された。

国際会議に関してはさらに、さまざまな経緯から早稲田大学で開催されることになったThe Legacy of Alfred Schutz: International Conference on his Centennial(1999年3月26日~28日)、とAlfred Schutz and his Intellectual Partners(2004年4月3日~6日)を具体的に立案する際に相談し、いずれの場合にも実行委員としてその企画・運営に最初から最後まで誠実に協力していただいたお一人も浜さんだったし、1995年10月13日にシカゴでM・ネイタンソン(Maurice Natanson)さん、G・サーサスさん、L・エンブリー(Lester Embree)さんと会った際に私のアイデアを打ち明け、彼らからは是非とも実現するよう励まされたばかりにその気になった年報『文化と社会』(*International Journal of Human Sciences*)を立ち上げる際に相談を持ち掛け、1999年に創刊号を刊行し2004年に第五号を刊行して休刊するまで、一貫して編集委員の一人としてその刊行を支えていただいたのもまた、浜さんであった。浜さんが上記二つの国際会議で、“Alfred Schutz’s Theory of Science and Ethnomethodology”(1999)、“The Primal Scene of Ethnomethodology: Garfinkel’s Short Story ‘Color Trouble’ and the Schutz-Parsons Controversy”(2004)という含蓄に富んだじつに興味深い報告をされたことを付け加えておきたい。

以上、浜さんとの40年のほんの一部を私の視点から振り返ってみたが、これだけで、私がいかにこれまで浜さんに支えられてきたかを思い知るに充分であった。これまで、私の思い付きに浜さんを巻き込み続けたことを思うと、忸怩たる思いを禁じ得ない。ただ今回、この小論を書くにあたって浜さんの最終講義原稿を読む幸運に恵まれ、浜さんが“Ethnomethodology and the Rashomon Problem”と題する報告をされたThe Society for Phenomenology and the Human Sciencesの1996年の年次大会(ジョー

ジタウン大学：Washington DC) が、浜さんのそれ以降の研究にとって重要な意味合いをもっていたことを知り、勝手によろこびを感じる事ができた。その年次大会には私も参加していて一緒に食事をしたりもしたが、浜さんにとっては、その折に訪ねられたスミソニアンで「エノラ・ゲイ」の復元された機体と「目が合ってしまった」ことが、のちに取り組まれることになる「歴史と記憶の社会学」を支える重要なトピック「広島原爆被害の記憶」へと向かうひとつのきっかけになったことを知り、そうした「場」に私も「居合わせた」ことを知ったことからくる、私の勝手なよろこびである。

そしてこのよろこびは、「空間・場所」と「垂直に積み重なる時間」とに結びついた「想起・記憶」を通していまここで「制作」される「歴史」へと向かおうとされている、浜さんの「歴史と記憶の社会学」の今後の展開を期待しているだけに、ますます大きいものになっている。「いまだ“未定”」といったただ過去を引きずるだけではなく、前に向かって社会学への「再入門」を宣言された浜さんが、これまで築きあげられた盤石の土台の上に、壮大で柔軟な構想のもと、「神の宿る細部」にまで目を配りながら社会の姿絵を紡ぎだしてわれわれの前に示してくださることを期待してやまない。